

目的 本研究は服装造形のための実験研究の一つである。既に皮膚の色調と有彩色という表題で、昭和43年より55年迄に計測した1107人の女子大学生の皮膚色調と純色の有彩色5色との関係や、明るく見える色調・暗く見える色調について報告し、更に明度4°, 6°, 8°の青色色紙との関係を心理実験を試み、その結果と報告した。今回は明度4°, 6°, 8°の黄色色紙を色研に依頼して作成し、肌色との関係を心理実験で試みた。

方法 1) 実験色票の作成 縦26cm横109cmの明度6°の灰色のラシマ紙に、縦13cmの明度4°, 6°, 8°の黄色色紙を空間9cmずつあけて貼付し、色紙の中央に3cm四方の肌色色票を貼付した。今回実験に使った肌色色票は2.5YR, 5.0YR, 7.5YR, 10.0YRのグループである。2) 実験の方法 対比現象の心理学実験の視感距離は7mとし、実験の照度450Luxとした。実験に参加した学生は44名である。実験に用いたイメージ用語は8形容詞対とし、7段階評価法で評定を行なった。その評定結果の資料に基づいて分散分析を行ない、F分散比による8形容詞対のイメージの心理的な有意性を分析した。

結果 黄色の明度は純色よりやや暗い4°, 6°, 8°としたが、肌色との関係は全体に顕著な差がみうけられた。肌色の明度の関係を形容詞対でみると「あっさりした—くどい」では、0.5%の有意水準で6.74であり、「地味な—派手な」の形容詞対では、16%の有意水準で2.02がみられた。黄色の明度については、0.1%の有意水準で差がみられ「溫和な—きつい」25.7, 「ドレスシーな—スポーティな」で36.69, 「平凡な—ハイセンスな」で51.03, 「クラシクな—モダンな」で58.47などであった。